



視覚情報とセクシュアリティ：
視覚障害者の性概念形成過程に学ぶ(2005年度第3回
コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, りか メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004914

視覚情報とセクシュアリティ — 視覚障害者の性概念形成過程に学ぶ —

佐藤（佐久間）りか

本日はご報告させていただき研究は2004年度から、お茶の水女子大学の21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」と日本性教育協会から研究助成金をいただいてスタートしたのですが、まだ研究途上にありますので、あくまでも中間報告ということで、皆さまからいただくご意見を今後の参考にさせていただきたいと思っております。

研究の枠組みは3つのステージに分かれているのですが、全体を通じての目的は、先天性の視覚障害を持って成人する人々のセクシュアリティ形成のプロセスを探ることにより、日常的に視覚的な性情報のシャワーにさらされている晴眼者のセクシュアリティのありようを相対化し、視覚メディアによる「性幻想」の商品化が個人のセクシュアリティに及ぼす影響を検討することにあります。主に視覚障害者の方を対象にした調査研究なのですが、いわゆる障害学的な観点からアプローチしたわけではなくて、むしろセクシュアリティ研究のほうから「視覚情報とセクシュアリティ」ということに興味を持ったところから、視覚障害に注目することになった、ということをもまず申し上げておきます。

実は研究を始める前に「このような研究をやりたいのだ」ということを、視覚障害者と関わっている晴眼者の方に相談したのですが、そのときに「あなたは晴眼者のことを研究するために、視覚障害者を利用しようとしているのではないか」ということを指摘されました。そのことには私もかなり悩みまして、それから視覚障害の当事者の方にも同じことを相談してみました。するとその方は「逆にオブラートに包んで、実は視覚障害者のためになることをやろうとしているとって、ごまかしながらやるのは不誠実だ。正直に自分の目的を伝えるべきだ」と言われました。その結果、私はある意味で、「二兎を追う」ことになりました。要するに、視覚障害

者の方から情報をいただくからには、それが何らかの形で視覚障害者の方のプラスになるような形にしてお返ししなければいけない。しかしそれと同時に、そこから学んで晴眼者の視覚セクシュアリティを問題化していく。その2つを同時にやりたいと思って、この研究に携わっています。

1 本研究の大きな枠組み

この研究は大きく3つのステージに分かれています。第1のステージが先行研究の収集と整理、第2ステージが盲学校や点字図書館等で視覚障害者に対して性に関する情報提供を行なっている方たちへのインタビュー調査、そして現在取り組んでいる第3ステージが視覚障害当事者へのインタビューです。私はこの研究を始めるまで、視覚障害者の方とのお付き合いが全くありませんでした。そうした経験もないのに視覚メディアとセクシュアリティに対する関心から、視覚メディアに触れない方のセクシュアリティを知りたいと思うようになったのです。けれども、それでいきなり性というセンシティブな話題について視覚障害者の方にインタビューをする、というのはあまりにも無謀な考え方だと思ったので、まずは視覚障害者のセクシュアリティの問題や性教育のあり方とかいったことで、どの程度研究がなされているのかというのを調べようと思いました。そんなわけで最初の年は、視覚障害児、視覚障害者のセクシュアリティに関する国内外の文献をざっと調べてみました。

その段階でまず驚いたのは、「障害者と性」というテーマで検索すると、実にいろいろな文献が出てくるんですけども、「視覚障害者と性」というふうに限定してしまうと、国内外どちらもそうなのですが、すごく資料が少ないということがわかりました。さらに国内文献と海外文献ではセクシュアリティに対するアプローチが大きく違うこともわかりました。国内の文献のほとんどが盲学校の先生方が書かれたもので、教材の作り方とか、あるいは重複障害を持っているお子さんたちにどういうふうに性の指導をするかといったことが中心になっているのに対して、アメリカでは学校教育の枠を越えて、例えば大人の方に対する性の情報の提供とか、いわゆる

社交 — つまり、どうやって恋人を見つけるか、パーティーなどで初めて会う人にどう対応するかとか、そういったことまで、全部ひっくるめた形で、すごく大きく性を捉えるようなアプローチをしている文献が数多く見つかりました。さらには、視覚障害女性の性被害防止のためのプログラムの紹介などもあって、日本の文献にはそういった観点が欠けていることが、わかってきました。

そのあと、視覚障害者の方がどういうふうに学校に行かれて、どのような環境で教育を受けられるのかということすら知らなかったものですから、第2のステップとして、視覚障害児、視覚障害者への性教育、あるいは性情報の提供に携わっている人々へのヒアリングを行いました。それを去年の『F-GENSジャーナル』というお茶の水女子大学COEプログラムの紀要の第4号に「視覚情報とセクシュアリティ — 盲学校の性教育が語るもの」と題して報告させていただきました。実際には点字図書館の方や、民間でいわゆるポルノ小説の音訳CDをつくって販売してらっしゃる方にもお話を伺っているんですが、『F-GENSジャーナル』のほうには、基本的に盲学校で受ける性教育ということに絞って、論文をまとめました。

国内の盲学校で現状どのような性教育が行われているのかを調べた質問紙調査は、既存のものがいくつもあります。全国に70カ所ある盲学校に質問紙を送って、養護の先生、あるいは保健体育の先生たちに「どういう性教育を行っていますか」と聞いているものがあるのですけれども（木村・尾原 1997；尾原・木村 1997；入谷・木村 1999；野原ら 2004）、性教育の具体的な内容まで踏み込んだものがあまりなかったので、インタビュー調査でもっと詳しく聞こうということで、6校の盲学校、首都圏だけではなく地方にある盲学校もまわりまして、それぞれの学校で性教育に関わっておられる先生方にお話を伺いました。性教育を積極的にやっているところもあれば、ほとんどやっていないけれどもそれでもよければ協力しましょうと言ってくださったところもあり、かなり幅広くいろんなお話が聞けたと思います。

今の盲学校での性教育の問題には、まずは教材が足りないということがあります。その大きな原因が、一般の学校での性教育の教材が、非常に視

覚教材に偏っているということがあるのではないかと思います。要するに、性というものを「語る」のではなく「見せる」という教育の方向が性教育全般に強くあって、とにかくビデオを流して、それを見てもらって、先生自身はしゃべらなくていいようにするという傾向があるのではないのでしょうか。やはり先生が自分の言葉で「性を語る」というのが、かなり難しいんだと思うんですね。それで日本性教育協会とか、性教育の専門家がちゃんと作ってくれたビデオを借りてきて、それをポンと流しておくのが一番楽、ということが一般校でもあるのではないかと思います。それをそのまま盲学校でもやっていたりするわけなんです。弱視の人たちは、一所懸命大きい画面に張り付いて見る。全盲の方には、一人一人横に先生が付いて、「今画面ではこうなってね、こうなっているのよ」とヒソヒソ解説しながら性教育の授業をやっている盲学校もあるんです。

あとは教科書などでも、性教育に関しては図解されているものがすごく多いわけです、性器の形とか。それらの図版は点図、触図という、手で触ってわかるようなものにはしてあるのですが、やはり先生方に聞いても、どうも生徒さんたちにはそれがよくわからないようだ。やはり模型のような立体的なものじゃないとわかりにくいみたいだということで、なかにはすごく頑張って自分で工夫して模型を作ったり、お人形さんを手作りされたりして教えている先生もいらっしゃるんですが、模型や人形を市販のもので購入しようとする、と、すごく高くて予算が足りないというようなこともあって、そういうものがあつたほうが良いと思っても導入できないところが多いのだということがわかりました。

それとあともう一つ、これは視覚障害うんぬんということ以前の問題で、いま盲学校自体がすごく少人数化しているということがあります。1学年に1人とか、あるいは中学部の3学年を合わせても2人しかいないとか、そういう学校がすごく増えてきています。そして重複障害児の割合が非常に高くなってきている。単一障害の方ですと、弱視の方は統合教育のほうへかなり移行していて、盲学校には先天盲の方や全盲の方だけが残っているというような形になっているので、すごく生徒数が少なくなっているのです。そのために、普通友人関係から口コミで入ってくる情報にさらされ

ない。一般の学校だと基本的にほっておいても性についての情報が入ってくるので、それを補う形で、正しいリプロダクティブ・ヘルスに関する情報を与えようとか、あるいは道徳的なことを教えようとかということがあるかと思うのですが、盲学校ではそれ以前に、「まったく性的な情報に露出されないということが起きてきているのではないか、むしろそれがすごく心配だ」というふうにおっしゃっている先生方が、かなりいらっしゃいました。

そんな中でも、一部には非常に耳年増な生徒さんたちもいるんですね。それは個々の環境、例えば家庭環境によるもので、お兄さんがいたりとかして、そのお兄さんがAVを見るときに一緒に見せてくれて、いろいろ解説をしてくれた、というような人もいます。盲学校によっては寄宿舍の人数が非常に多いところもあるんですが、そういうところだと年齢の幅も広くて、年齢が上の人たちからどんどん情報が入ってくる。それでかなり耳年増になっていくというような傾向もあるのですが、逆に寄宿舍の人数がすごく少ないというところに無菌状態で置かれてしまうと、本当に何もわからない。例えば「性交」という言葉の意味とか、「子どもがどうやって産まれるか知っているか」と、中学生に聞いても答えられなかったりして、先生のほうがびっくりしてしまうと。盲学校の保健体育の先生には、一般校から移ってきて盲学校で教えるという方もいらっしゃるのですが、自分がこれまで培ってきた「一般校における常識」みたいなものを前提に話を進めていくと全然伝わらなかつたりするというようなことを話しておられて、そういった既存の質問紙調査では見えてこなかった実態というか、現状がある程度そこでわかりました。

こうした背景調査的なところを踏まえながら、ある程度わかったといっても、ほんの一部がわかっただけなんですけれども、視覚障害者の方の情報環境みたいなものが少し見えてきたかなというところで、今度は当事者の方にお話を伺いたいというふうに思って始めたのが第3ステージで、現在、先天盲者および早期失明者へのインタビューをやっている最中です。現在20名ほどにお話を伺ったところなので、それについてあとのほうで少しお話させていただきます。まだ、データを集めたばかりで、ほとんど分

析には踏み込めていないので、今日は自分がこの研究をするにあたって前提としているセクシュアリティに関する考え方を、中心にお話させていただきたいと思います。

2 セクシュアリティに関する理論的前提

「われわれ人間は、イメージを喚起し、物語も紡ぎながらでなければ性活動ができないのである」（岸田 1992）というのは、心理学者の岸田秀が言っている言葉なんですけれども、岸田は、人が性行為を行うには、本能だけでなく「性幻想」の助けが必要であると主張しています。彼は、ポルノグラフィとは性的興奮を惹き起こして性活動を支えるイメージ（例えば、写真とか絵画）や物語（ポルノ小説）といったものであって、それは単に性的興奮をより強く惹き起こすための道具なのではなく、それなしには性的興奮自体があり得ないものだというふうに定義しています。もちろん現実には、偶然に性器の刺激が快感をもたらすことを知った子どもがマスターベーションを覚えるといったようなこともあるわけです。彼は「マスターベーションも幻想に頼らなければできない」というふうに主張するのですが、それは事実ではないだろうと私は思います。

けれども、果たして本能だけに頼っていて、マスターベーションだけではなく、他者との性器の結合を伴う性交を行うことが可能なかどうかということを考えると、ちょっとそこはわからないなというふうに私は思っています。たとえば幼い男女の子どもをどこかに隔離した状態で、一切性に関する情報を与えないで育てて、その2人が自然にセックスするようになるかというのを実験することができればわかるでしょうけれども、実際にはそんなことができるはずはないので、本能だけで性交できるかどうかというのは結局検証し得ないことなんでしょうね。

ここで岸田がいう「物語」というのは、平山尚が障害者の性の位置づけを考えるうえで、有用な概念として紹介した、アメリカの社会学者ジョン・ギャニオン（John Gagnon）の「性シナリオ」、英語ではsexual scriptという言葉ですが、性シナリオに共通するものがあると思います。

平山は岸田と同じく、人間の性を単に生まれたときから持っている本能とは見ないで、それぞれが属する文化社会における価値や規範の一部として、成長の過程で学習されていくものというふうに捉えています（平山 1985）。Gagnonの「性シナリオ」とは、特定の文化社会の中で承認されている、誰と、どのように、いつ、どこで、何のために性行動を起こすのかを明らかにしてくれるような一種の青写真というか、マニュアルのようなものだというふうに考えています。

近代社会では人は主に、身体に変化が起きる思春期に、他者との相互関係を通じて成人の性行動の知識と技能を学習します。しかし、社会に流通している性シナリオにはかなりの多様性があり、個々人が成長過程で置かれていた社会的な位置や宗教的・民族的慣習によって、接触し得る性シナリオの種類も異なっており、さらにその中からどのようなシナリオを選び取るかというのは、個人の好みによるところも大きいと思います。しかも、性シナリオの学習過程は、通常の学習とは異なり、意識的・組織的に学校などで学ぶというようなものではなく、その人を「取り巻いている世界が与える暗示とか手掛かりを徐々に積み重ねて無意識の中に学ん」でいくものと理解する必要があります。

平山は（健常者における）ドミナントな性シナリオから外れた人々の性が抑圧されるプロセスに注目することで、脳性まひや脊椎損傷、知恵遅れの人々といった障害者が直面する性の問題を解き明かしていきませんが、本研究では、障害者の性を外的に制限する「構造」の一部として性シナリオを捉えるのではなく、視覚障害者のセクシュアリティ構築における「エージェンシー」の一要素として捉えてみたいと思っています。¹⁾

先行研究のレビューでも見たように、「障害者と性」という問題設定の枠組みの中では、視覚障害者の性が問題になることはあまりありませんでした。障害者の性が問題視されてきたのは、主に肢体の自由がなく性行為の完遂に他者の介助が必要になるようなケースとか、あるいは社会の性規範を理解することができずに逸脱的な性行動を繰り返してしまう知的障害者のケースが挙げられると思います。四肢に不自由がなく、自力で社会生活を営むに十分な判断力を持つ視覚障害者の場合、その人たちの性活動が

周囲の人々との摩擦を生じることはいないため、障害者の性の権利を主題化するような文脈で「視覚障害者の性」がクローズアップされるということは、あまりなかったのではないかと思います。

とはいえ、「視覚障害は情報障害」といわれるように、視覚障害者には情報へのアクセスに制限があり、特に性的な情報となると一層入手しにくい状況があります。そういう意味では、視覚障害者においても性的権利が十分に保障されているとは言い切れないと思います。しかも、アダルトコミック、アダルトビデオ、アダルトサイト、アダルトゲームといった、メディアを通じて流通する性シナリオの大半が視覚情報を主とするものであることを考えると、性をめぐる視覚障害者と晴眼者の情報ギャップはますます広がっていると考えることもできると思います。

しかし、ポルノグラフィックなメディア産業のもと、とめどもなく増殖し続ける性シナリオにアクセスを持つことが、実際に個人個人の性の選択肢を増やしているのかということになると、疑念を抱かざるを得ません。これまでの「障害者の性」の問題設定の背景には、障害者も健常者と同じ人間である限り、当然「性的な欲望」を有し、それを満足させる権利を有するという考え方があるわけですが、その「性的な欲望」の形というのは万人に共通なもの、つまり本能によって決定づけられるものとは限らないというふうに私は考えます。メディアを通じて流通する商品化された性シナリオによって形作られるものなのであれば、接触するメディアの種類によって、セクシュアリティのありようも差異があつて当然であろうと思うわけです。²⁾ 視覚障害者が性情報にアクセスしにくいからといって、必ずしも彼らのセクシュアリティが晴眼者に比べて貧困なものになるとは限りません。

本研究では、性をめぐる価値観や規範が大きく変化しつつある今日の日本社会において、視覚障害のある人々が自分たちを取り巻く世界が与える「暗示や手掛かり」をどのように読み取って、それぞれのセクシュアリティを編み上げていくのかということを明らかにし、それを通じて晴眼者のセクシュアリティのありようを脱・自然化して、批判的に捉えなおしてみたいというふうに考えています。

3 性的活動を可能にする 3 種類の情報 (性シナリオ)

次のステップとして、個人が性的な活動を営むのにどんな情報 (性シナリオ) が必要だろうかということを考えてみました。

人が性的な活動を営むのに必要不可欠な情報 (必ずしも十分条件ではないでしょうが) とは何でしょうか。ここでいう「性的な活動」にはマスターベーションも含まれますが、主として他者の身体への接触を伴うような活動、異性愛だけでなく同性愛も含めてですが、それを想定しています。³⁾ 人間には食欲とか睡眠欲といった様々な身体的快楽への欲望がありますが、それらの欲望が直接的に自分の身体に働きかけること、例えば食べることとか眠ることで満たされるのに対し、他者の身体の媒介があって初めて満たされるものとして、自己の身体的快楽が定義づけされているところに、「性欲」の特性があるのではないかと思います。岸田のいう「性幻想」は、本来は自己完結的である快楽への欲望を、他者の身体に向かわせるために必要な情報というふうに考えることもできるのではないかと思います。これをひとまず「エロス情報」と呼ぶことにします。

しかしながら、現実にはエロス情報だけ、つまりポルノグラフィックな情報、性的なイメージを喚起するような情報だけでは他者との性的な活動を営むことはできません。そこで私は「エロス情報」のほかに、もうあと 2 つの情報形態 (性シナリオのタイプ) を想定してみました。⁴⁾

実際に他者と性交するためにはまず、性交したいと思う相手を見つけ、性交の合意を取り付け、性交を行うのにふさわしい場所を見つけて、その使用权を獲得しなければなりません。合意のある性交というのは、「愛情表現」という形をとる場合もあれば、「買売春」というような形をとる場合もあるでしょうけれども、もし欲望だけがあって相手の合意が取り付けられないとき、あるいは社会的に性交を行うのにふさわしいと認められない相手 — 例えば子どもとかですね — である場合には、社会的な懲罰のリスクを覚悟のうえで、力づくで性交に及ぶか — つまり強姦ですね — あるいは合意があったとしても、社会に認められないような相手であれば、性交が行われた事実を隠蔽するための様々な手立てを考えなければならな

い、周りの人から見つからないようにしなければならないということで、要するに欲望だけがあればすむというものではないわけです。つまり、恋愛の技法、ナンパや口説きのノウハウ、ラブホテルや風俗産業の情報、さらには社会規範の理解や法律の知識などが性交の実現には必要なのだというふうに思います。こうした性的欲望を前提とした性行為の実現のために必要となる情報を、ここでは「ロジスティクス情報」（略してロジ情報）と呼ばせていただきます。⁵⁾

さらに、社会生活を営む存在としての人間には、「性交の結果」に対する責任を持つことが求められます。したがって、性交がどのような結果をもたらす可能性があるかについての知識が必要であり、望まない結果を回避するための情報が必要となります。それが「リプロダクティブ／セクシュアル・ヘルス情報」（略してリプロ情報）であると思います。性感染症の予防とか避妊の知識といった、学校での性教育で伝達されるような情報がこれに当たります。

つまり、人が性的な活動を営むには、エロス情報、ロジ情報、リプロ情報の3種の情報が揃うことが必要なのです。性交はエロス情報だけでは実現しないというのは今申し上げたとおりですが、ただ性交さえすればいいというのであれば、エロス情報にロジ情報さえあればリプロ情報がなくても可能です。リスクを回避したいと思う人間は進んでリプロ情報を収集しますが、リスクテイカーの場合はリプロ情報がなくてもすんでしまう。⁶⁾ そのために学校教育で情報をプッシュしなければならないということがあります。

また、ロジ情報は情報として与えられても、それを実際に使いこなせるかどうかというのは、個人の資質にかかる部分が多い。つまり恋愛の技法とかナンパとか、口説きとか、そういったものは情報として入ってきたからといって、それを実際に使えるかどうかというのは本人にかかってきます。それに対してエロス情報というのは、相手がいなくてもマスターベーションという形で、消費することが可能な情報になります。そのため、コストパフォーマンスが一番高い情報ということが言えます。そのためにエロス情報の需要は非常に大きく、巨大な市場を形成しているといえると

思います。

こうした3種の情報（性シナリオ）がどのようにメディアを通じて伝達されるかをまとめたのが、表1です。この表は、エロス情報、ロジ情報、リプロ情報、それぞれを例えば口コミ、学校教育、小説・実用書、雑誌・夕刊紙、マンガ・コミック、ラジオ・有線・テレビ、映画、ビデオ・DVD、ゲームソフト、インターネットといったメディアに分けて、例えば口コミだとエロス情報はそれほど入ってこないけれども、ロジ情報は入ってくるとか、あるいは、小説や実用書、雑誌や夕刊紙ではエロス情報はたくさん入ってくるけれども、いわゆるリプロ情報みたいなものは主に学校教育から入ってくるとか、学校教育ではエロス情報はほとんど入ってこないとか、そういったことを一覧表にまとめたものです。

表1

	エロス情報	ロジ情報	リプロ情報
口コミ	△	○	○
学校教育	×	×	◎
小説・実用書	◎	△	○
雑誌・夕刊紙	◎	◎	○
マンガ・コミック	◎	△	△
ラジオ・有線・テレビ	○	○	△
映画	○	△	×
ビデオ・DVD	◎	△	△
ゲームソフト	◎	△	×
インターネット	◎	○	○

×△○◎は各メディアから得られる情報の量（◎多い、○ある、△たまにある、×ほとんどない）

網がけ部分は視覚障害者にアクセスしやすいメディア

エロス情報というのは、今日の日本社会では、圧倒的にビジュアルな商業メディアを介して伝達されることが多くなっています。それに対して、ロジ情報は商業メディアを介しても伝達されますが、エロス情報に比べれば活字メディア、いわゆるビジュアルなメディアではなくて活字メディア、

雑誌とか夕刊紙などが伝達に寄与する比重が高いということが想像できます。例えば、女の子にもてるのにはどうしたらいいかとか、男の子に魅力的に見えるにはどうしたらいいかといったようなことは、やはり雑誌によく載っています。あといわゆる風俗情報、どこのソープにどういうお姉さんがいるというようなことは、夕刊紙とかに載っています。ですから、そういった情報はそういう定期刊行物であるような活字メディアに載っていることが多いです。

一方、正確なりプロ情報というのは、学校教育で伝達されるかもしれませんが、多くの場合は口コミ情報として、しばしば不正確な形で伝達されていきます。実際、1999年の日本性教育協会の調査では、中学生と高校生に、「あなたの性に関わる意識や行動に影響を与えたものは何ですか」というふうに聞いているのですが、この問いに対してトップに挙がったのは、やはり「友人」なんですね。それに続くのが、中学生、高校生ともに「マンガ・コミック」。これは男女ともに「マンガ・コミック」というのが挙がっています。そして3番目には、「テレビ・ラジオ」が挙がっているのですが、男子高校生のみ「ビデオ」と答えています。2004年秋に実施された全国高等学校PTA連合会の調査では、中学生の時に「アダルトビデオ」を見たことがあるというのが男子で55.9パーセント、女子は16.1パーセント。エッチなマンガを見たことがあるのは、男子が66パーセントで、女子が52.4パーセント。インターネットのエッチなサイトを見たことがあるのは、男子が41.6パーセント、女子が11.8パーセントとなっており、性シナリオを学習する年代の若年層において、視覚メディアからの（しかも個室消費型のメディアからの）情報収集が大きな比重を持っていることが明らかになっています。

これを視覚障害者の場合で考えてみると、口コミや「テレビ・ラジオ」といったものについては、ほとんどアクセスの制限というのはありません。テレビの映像は見えませんが、音声情報に関しては制限はないわけです。しかし、文字情報となると、必ずしもすべての文字情報が音訳・点訳されるわけではないので、情報へのアクセスがかなり制限されてきます。小説や実用書の類は、まだ点訳されているほうだと思いますが、週刊誌や夕刊

紙のような情報は、ほとんど点訳されることがない。さらに晴眼の中高生に人気が高い「マンガ・コミック」や「アダルトビデオ」などは、視覚障害のある若者には利用しにくいものであると言えます。

こうした状況を踏まえて視覚障害者のセクシュアリティ形成に関する仮説を立ててみると、幼い頃に視力を失った人、いわゆる性シナリオ学習期に視覚からの情報がなかった人は、エロス情報やロジ情報の主要な情報源にアクセスできないので、そのことによる不都合とか不便があるのではないだろうか。

それから、同じくそういう立場の人は、口コミや活字（点字）情報に頼る割合が高くなり、特にエロス情報は活字や音声メディアが中心となるため、性幻想に言語性・物語性が強くなるのではないか。つまり、例えばいわゆるグラビア雑誌のヌードとかというのは、固定されたある1シーンだけを切りとったような写真なのですが、ポルノ小説のようなものには、ある程度ストーリー性があるわけで、そういった性幻想の影響が強くなるのではないかということがあります。

それから、盲学校では理療科に進まれる方がけっこういらっしゃるので、そういったところに行かれた視覚障害者の方は、晴眼者よりもリプロ情報をけっこう持っているということが考えられます。⁷⁾ ですから、単純に視覚障害があるから情報が少ないとは言えないだろうということがあります。

以上は一般論として言えることなのですが、そこに視覚障害者をめぐる最近の状況というのを重ね合わせてみますと、盲学校における生徒の人数が激減して口コミ情報が減ってきている。先ほど申し上げたように、横のつながりで友だちから入ってくるような情報が減ってきているのではないか。それから、文字読み上げソフトの開発によって、インターネットへのアクセスが可能になり、個室消費型の性メディアへのアクセスが、視覚障害者の方にも容易になってきているのではないかということがあります。こうした変化を考えると、若い世代ではより晴眼者に近くなってきているのではないか、というような仮説も成り立つのではないかと思います。

1999年に実施されたNHKの調査が本にまとまって出ていますけれども

(NHK「日本人の性」プロジェクト 2002)、上野千鶴子さんと宮台真司さんが、そこでいろいろ分析をなさっていて、一般日本人における性の世代的变化ということでは、若い世代ではビジュアル化が進んでいるということと、個人化、個室化が進んでいるということが言われています。昔の世代は、例えばビジュアルなポルノを見るときでも、映画館に行って日活ロマンポルノとかを見ていたわけで、ほかに同じ空間を共有するような人たちがいるなかで、それを見ていた。それがアダルトビデオの登場により、メディアを個室に持ち込むことができるようになり、なおかつ今は、インターネットでそういった情報をいくらかでも受け取ることができるようになってきているので、非常に個人化が進んでいるということが言えます。そういう意味でいうと、視覚障害を持つ若者においても、ビジュアル化はなくても、個人化、個室化というのは、晴眼者と同じように起きている現象だろうということが言えると思います。

こういった仮説を踏まえながら、本研究では20代から40代の生まれつき視力を持たない先天盲の方、あるいは思春期以前の子ども時代に視力を失った方々にお話を伺い、「どのようにあなたは性について学んでこられましたか」「どのようにあなたの性概念は形成されましたか」というようなことを聞いていくようなインタビューを行なっています。

4 インタビュー調査の概要

調査対象は先天盲者か思春期以前に視力を失った方で、20代から40代の男女。視力は明暗弁以下、つまり明るさがわかる程度で、ものの形はわからないという程度の視力を条件として、声をかけさせていただきました。現実にはもうちょっと視力のある方も入っていますが、主に先天盲の方が多かったです。

現時点では21名の方のお話を伺ったところで、表2のように女性が11人、男性が10人です。20代前半の女性3人、男性1人。20代後半が女性2人、男性3人。30代前半の女性1人、男性3人。30代後半の女性4人、男性2人。40代が足りなくて、40代前半が女性1人とそれから後半が男性1人で

す。サンプリングの方法はスノーボールと言うか、盲学校の調査に協力してくださった盲学校の先生方から紹介していただいたり、あるいは国立特殊教育総合研究所の方からご紹介いただいたり、あとは視覚障害者の性について論考を發表されている方にご紹介いただいたりということで、いろいろな方々のご協力を得てなんとか21名になりました。なるべく性別・年齢・居住地に関してはバランスを取ろうということで、要するに代表性というよりは、なるべく幅広く取りたいということで集めています。

40代が今非常に少ないので、これからもう少し呼びかけをして集めていこうと思っています。結果的に見るとインターネットを使える世代の方へのアクセスは、わりと簡単にできたんです。40代以上の方になるとそれができない方がかなりいらっちゃって、そうなるとう本当に口コミじゃないとなかなかたどり着けない。また、研究への協力承諾を得る段階ですごくステップが複雑になるんですね。メールが使える方には、「私はこういう趣旨でこういう研究をしたいのです」ということを書いた研究協力依頼書と、そのほか質問項目がこのような内容ですといった説明文と、承諾書の書面をつくりまして、メールで送って、そこにご自分のお名前とかご住所を記入していただいて（本当の意味での自署ではないので、その人が本当に承認したかどうかとはわからないと言えそうですけれど、その方のアドレスから返信していただきますので）、それを送り返していただく形で、承諾書を取りました。ただ、メールが使えない方に関しては、全部点訳してもらってお送りします。点訳した承諾書に点字で名前や住所を打って返していただくという方法で同意をいただいた方もいます。もちろんご家族の方に代筆していただくこともできると思うんですけども、なにかそのへんが今までやってきた調査とはちょっと違った手順というか、少し気を遣った部分ですね。これから、もう少し40代の方を増やして、世代の違いを見たいと思っていますところでは。

表2 2006年3月時点での協力者数

	女 性	男 性
20代前半	3	1
20代後半	2	3
30代前半	1	3
30代後半	4	2
40代前半	1	
40代後半		1
合計	11	10

内容的には半構造化インタビューの形を取っていきまして、最初の2件は、まずラフなインタビューガイドをつくってお話を聞きに行って、その方たちから得た内容を分析した上で、また少し中身を洗練して、実際にはどんどんお話を伺うたびにインタビューガイドが進化していきまして、今たぶんバージョン6ぐらいになっていると思います。従って、まったく同じことをみなさんに聞いているわけではありません。

インタビューでは「異性の身体の仕組みについての理解は、いくつぐらいのときからありましたか?」「初めてセックスとか性という言葉を目にしたのはいくつのときでしたか? 何から知りましたか?」「その意味がはっきりわかったのは、言葉として聞いたというだけではなくて、それが性器の結合を意味するということを知ったのはいくつのときですか?」「同性愛について知ったのはいつですか?」というようなことを先ず初めに聞いています。それから「学校ではどんな性教育を受けましたか? それは役に立ちましたか? 裸体ボランティアについてはどう思いますか?」というのも聞いています。この裸体ボランティアというのは、スウェーデンの盲学校で、ボランティアの方が教室で裸になって生徒さんに実際に性器を触らせるという試みがあるらしく、それがビデオで紹介されていて、日本の性教育関係の方々の間では、かなり知られているようです。盲学校の先生の中には、日本の性教育関係者から「なぜ日本ではそれができないのか」と責められたというようなことをおっしゃっていた方もおられました。そのビデオが出たのはずいぶん昔、70年代初頭ぐらいで、

それが日本語に訳されて出たのも1980年代の初めぐらいだったと思うのですが、その当時にそういうことを言われたと。今はあまりそういう話はないと思いますが、盲学校の先生方もなかなか触図ではわからない、模型や人形を使わなければ、というような話もしていらしたので、「じゃあ実際どうなんだろう、ボランティアが来て、冷たく固い模型ではなくて生身のからだに触れられたら、それは当事者にとって本当にいいことなんだろうか」というのがあったので、ここで聞いています。

このほかに「避妊や性感染症予防の方法など、性の健康や安全に関する情報を得たいと思ったときには、どんな情報源を利用しましたか?」「恋愛のテクニック（口説き方や相手に自分を魅力的だと思わせる方法）やデートのノウハウ（デートスポットやラブホテルの情報）、それからコンドームやピルの入手方法や風俗産業の情報などを得たいと思ったときには、どんな情報源を利用しましたか?」「エロチックな情報や性を楽しむためのテクニックについての情報を得たいと思ったとき、どんな情報源を利用しましたか?」といったことを聞いています。さらに「これまでにマスターベーションをするときに、エロチックなメディア（ポルノ小説やテープ等）を利用したことはありますか?」、また性交経験のある方には「実際にセックスをするようになったときに、異性の身体構造や避妊の仕方、あるいはセックスの体位や性的なテクニックについて、十分な知識や情報がなくて不安に思ったり、困ったりしたことはありましたか?」というのも伺っています。また性的な被害経験についてもお聞きしました。

5 インタビューを行なう中で見えてきたこと

まだ分析を始めたばかりの段階ですが、今の時点でわかったことをお話しします。今回、中途失明者（といってもみなさん12歳より前に視力を失っている方なんですけれども）の方で、10歳ぐらいまで目が見えていた方の場合は、視覚記憶を非常に鮮明に持っていて、そこから世界のイメージを作り上げているんですね。今回のインタビューでは、先天盲の方も早期失明の方も両方とも含んでいるのですが、現実にはその「性幻想」のあり方

には、その両者のあいだではかなり大きな違いがあるのではないかということが感じられます。ある方は自分が見えていたところにポルノを見たことはなかったけれども、裸体は見たことがある、一緒にお風呂に入ったりとかして、大人の人間の身体は見たことがあるので、そうするとポルノ小説とか読めばどういうふうに絡まっているかというのは、大体頭の中でそのイメージがビジュアルなものとして浮かぶというふうにおっしゃっていました。先天盲の方ではそういったことはないだろうと思いますので、そこがすごく違うのではないかなと思います。

視覚障害による情報不足を切実な問題と捉えている人というのはそれほど多くないという印象です。視覚障害だから情報がないというよりも、性というのは視覚障害があろうがなかろうが他人にストレートには聞きにくいものであって、情報が得にくい問題であろうから、自分たちだけが特に情報がないとは思わないという方もいらっしゃいました。ただ男性の中には、やはり一度は絶対AVを見てみたいと思う、見るのと想像するのでは全然違うだろうと思うから、とおっしゃっている方もいらっしゃった。だからと言って、すごく困っているかということ、そういうことではない。もっと知りたいなというのはあるけれども、ということでした。

また、友人からの口コミというのはかなり重要な要素になっているというのがわかりました。1学年の生徒数が大きく影響しています。40代の方だと1学年に10人以上いた、20人いたというような方もいらして、その多くが寄宿舍に住んでいたのも、何十人という人が一緒に暮らしていて、一緒にお風呂に入ったりする。当時は寄宿舍も大部屋で、6人ぐらいで一緒に寝るようなところだったから、マスターベーションをしている人が同じ部屋にいればすぐわかる、というような状態なので、自然と性に関する情報が入ってきた、ということなんですね。それに対して、寄宿舍に入ることがない、自宅から通学していたような人だと、やはり性的な情報からは隔離されてしまう傾向があります。また、寄宿舍であっても、(中途失明者の大人の方はたくさんいるのだけれど)、中学生とか高校生となると数人しかいないというところも、地方の盲学校ではあるので、そういうところだとなかなか情報が入ってこない。

弱視の友人あるいは晴眼者の友人がいるかどうかということも大きな要素になっていて、弱視の友人から情報を得たという人は非常に多かったです。特に若い世代の人だと、寮でみんなで集まってAVを見て、それを弱視の人が一所懸命解説してくれたとか、女性でも弱視の女の子がレディースコミックみたいなものを持ってきて、それを説明してくれるとかという話もありました。あとは晴眼者の友人を持っている人、例えば大学は一般大学に進まれたような方ですと、晴眼者の友人からすごくいろんなことを学んだというふうにおっしゃいます。

上のほうの世代は、盲学校での性教育で何を習ったか全然覚えていないという方もいらっしゃいました。雄しべ、雌しべくらいは習ったと思うけれども、実際の性交については習った記憶がない。あるいは避妊についてはほとんど習っていないというんですね。それが30代前半の方になると、学校時代がちょうどエイズがすごく話題になった時期にあたるので、エイズのことは習っている。それなのに、避妊については何も聞いていないという人がけっこういらっしゃいました。中には、かなり積極的に避妊の教育をやっている学校もあって、男性器の模型と実際のコンドームを使って装着の方法を学んだという人もいましたが、その一方で自分がセックスするまでコンドームに触れたことがまったくなかったという人も大勢いました。

あと、理療科を出られた数名の方のなかに、解剖学の実習に参加して、そのときに遺体の性器に触れた。「初めて異性の性器に触れて、ああこういう形なんだということで、すごく納得した」とおっしゃった方がいらっしゃいました。逆に盲学校の教師をしていらっしゃる方は、「自校の生徒が解剖実習で執拗にご遺体の性器に触れていた、ということが後にすごく問題になった」という話をされていました。このあたりは非常に難しいところですね。例の裸体ボランティアの質問に対して、「ボランティアが来てくれたらいい」と言った人は、21人のうち3人か4人でした。「晴眼者の性教育だって、生身の裸を見せたりしないでしょう？ そんなの嫌ですよ。見るのが恥ずかしいなら、それを触るほうはもっと恥ずかしいですよ」とおっしゃっていた方もいらっしゃいます。「それならもっと小学校の低

学年のとき、自分のなかにバリアーがないときに触れさせてもらったほうがいい」という意見もありました。

若い世代、30代前半より下の世代の人では、学校の図書室にちゃんと性教育専門の読本、アーニ出版などが出しているようなものの点訳本が置いてあって、それから学んだという人がいらっしゃって、ひょっとすると、一般の人よりもそういう人の割合は高いかもしれません。つまり、外から商業化された性情報が大量に入ってくる前に、そうしたきちんとした情報に触れて性を学んだという人が、特に若い女性に多かったと思います。

ロジスティックな情報については、やはり口コミが中心です。男性の場合、先輩に風俗店に連れて行ってもらったという人が何人かいましたが、30代以上の方ですね。20代ではそういう人はいなかったです。それからタクシーに乗って運転手さんに「どこかソープに連れて行ってください」と言えばいいので、別にメディアから情報がなくて困るということはないと、おっしゃっていた方もいます。

しかし、ラブホテルに行きたいんだけど行けないという話は複数の方から出てきました。相手が晴眼者だったり、弱視の方だったりすればいいのですが、全盲のカップルの場合にはどこにそういうホテルがあるのかわからない。さらに、「入口のところのボタンで部屋を選んで鍵を受け取り、お金を払うにも人と直接話をしないで、部屋に行くようになっていくところが多いと聞いているが、全盲同士だったらどうやって、その部屋にたどり着けばいいのか」とおっしゃっていて、ちゃんと受付に人がいて、部屋まで連れて行ってきて、部屋の説明もしてくれるところを友だちに紹介してもらって行ったんだという方もいました。

女性は主に恋愛の技法についての情報には関心を持っているけれども、実際のセックスに関わるような情報の収集を積極的にしている人はいませんでした。例えば、愛される女になるためにはどうしたらいいかが書かれているような占い本を一所懸命読んでいるという人もいらっしゃいましたし、恋愛に関するエッセイ集などを読んで随分勉強しましたよという方もいらっしゃいました。コンドームの入手の仕方などは知識としては知っていますが、現実にはほとんど男性任せで、自分でコンドームを買ったこと

があると言った女性はいませんでした。ホテルを探すのも男性の仕事という感じがありました。

エロス情報については、個人消費型のものとしては、ポルノ小説が載っている点字雑誌、エロテープ（ポルノチックなあえぎ声などが入っているもの）、有線のアダルトチャンネルなどが情報源として挙がってきました。インターネットのアダルトサイトにもアクセスしている男性はかなりいらっしゃいます。ところが女性では、有線のアダルトチャンネルを聞いたことがある人や、ポルノ系の点字雑誌を読んだことがあるという女性はいましたが、インターネットのアダルトサイトにアクセスしたことがある人はいませんでした。またテープに関しても利用したことがあるという女性はいませんでした。男性の場合は友人から回ってきたとか、この人を通じれば買えるとかという横のつながり、口コミでテープを入手していたようです。

女性ではエロチックなイメージは、わりと一般的な小説から得ています。「学生時代、すごく性のことに関心があったときに、徹底的に渡辺淳一を読みまくった」という人がいました。あとは、瀬戸内寂聴、村上龍、村上春樹、赤川次郎とか笹沢左保といった名前も挙がっていました。ハーレクインロマンスという方も女性に複数いらっしゃいました。

性幻想については、視覚経験のある人は、視覚的なイメージを思い浮かべながらマスターベーションをしようと言っていました。まったく視覚記憶のない方では、声にイメージを喚起されるということをおっしゃっています。マスターベーションに関しては、女性は自分がしているとはっきり答えられた方は少ないです。まったくしたことがありませんという方も何人いらっしゃいました。しているけれども、それは性のことがわかる前からしていたという方もいました。つまり、要するに性器の刺激が気持ちいいということがすごく小さいときからわかっている、今もするが、特に性的なイメージを必要としないと、その方はおっしゃっていました。マスターベーションについてはかなり個人差が大きいと感じられます。

セックスの体位については、よくわからないので不安だとおっしゃる方もいれば、学生時代に同性の先輩から手取り足取り教えてもらったので困

らない、という男の人もありました。ただ、小説を読んだりするとそういう話が出てくるんだけど、具体的にどういう格好なのかがよくわからなくて、それはきっとビデオを見ればわかるんだらうから、そこがわからないのがちょっと残念だ、というようなことは、男の方も女の方もおっしゃっていらっしやいます。

性被害については、女性は大半の方が経験がある。例えば「定期が落ちましたよ」と言われて手を出したら性器をつかまされたとか、同じ盲学校に中途失明で入って来た大人の生徒にいたずらをされたという経験を持つ女性がいました。また、襲われたりしたわけではないんだけど、「駅まで案内しますよ」と言われて、全然違うところを連れ回されたとか。普通の痴漢程度のことであれば晴眼者の女性にもよくあると思うのですが、視覚障害者の女性の場合は、同じ人間が繰り返して接触してきたときに、それを察知することができないのが非常に怖い、ということをおっしゃっています。

それでなるべく夜は人通りの多いところを歩くようにしたり、後ろから足音が付いてきているなどと思ったらなるべくコンビニに入って時間をつぶすようにするとか、携帯電話で話しながら歩いているふりをするとか、それぞれいろんな工夫をしているんですが、性被害防止について学校で教育を受けたことがありますかということを知ると、どなたもそういう教育は受けたことはないということで、護身術をぜひ習いたいと言う女性もいらっしやいました。

以上、全体を通してジェンダー差がかなり大きいということを感じています。先ほども引用したNHKの調査では、若い世代では性に対する態度にジェンダー差がなくなりつつあるということが言われていましたが、今回の調査ではあまりそういうことは感じられなくて、若い世代でも視覚障害者の方の場合、男女の差はすごく大きいと感じました。

あと晴眼者との対比で感じたことですが、ある方がインタビューのなかで、「女の子はキスするときって目をつぶったほうがかわいいんですってね」とおっしゃったんです。弱視の人と付き合っていたときに、その人に「やっぱり目をつぶったほうがいい？」と言ったら、「そのほうがいいかな」

って言われたので、それからはつむるようにしたと。「私には関係ないんですよね、つぶろうがつぶるまいが」とその人はおっしゃって、なるほどというふうに思いました。

例えば晴眼者の場合、テレビのドラマや映画のなかのラブシーンを通して、性交に及ぶまでのプロセスを学んできているのではないかと思うんですね。例えば、キスシーンがあったとしますね。男性と女性が向き合っていて、次第に2人が近寄って、男性が顔を近づけると女性は目をつぶる。それで男性も目をつぶって唇をつけるというふうな流れがあるわけです。その間映画やテレビだと会話もなく、ト書きもなく、BGMくらいはあるかもしれませんが、そうした仕草はまったく言語化されないわけですが、晴眼者にはそのシーンが頭に入っています。小説では目を閉じたとか、まぶたを閉じたといった描写が出てくるかもしれませんが、ある意味ではその辺はお約束事のようなもので読者の想像に任されていて、必ずしも毎回言語化されてはいないだろうと思うんですね。

私たちのまわりにはそうした言語化されてない性シナリオというのがいっぱいあるのではないだろうか。そこをどういうふうに、視覚障害者のみなさんは学んでいくのか。本当は学ぶ必要はないのかもしれないし、逆に言えば、それがスタンダードだと思いこんでいるわれわれ晴眼者の、無意識のうちにそうしなくちゃと思い込んでしまっている自分たちのありようというのが、少し見えてきたかなというのがありました。これからもっと丁寧にデータを読み込み、さらに重ねてインタビューも行いながら、より深く分析をしていきたいと思っています。ご清聴、ありがとうございました。

【註】

- 1) ここでは性シナリオをバトラー (1997=2004) のいう「エージェンシー (行為体)」によって引用される言語の一種と捉えています。性的な「主体」とは他者の言語としての性シナリオの反復の結果作り出されるものと考えます。
- 2) 単純に視覚メディアに触れられる晴眼者の方が、視覚障害者よりも豊かな性を営むことができるわけではなく、逆に晴眼者が経験し得ない性的な快

楽や欲望のあり方が存在することも考えられるでしょう。

- 3) これは加藤秀一（1998）のセクシュアリティの定義「他者との身体接触にかかわる快楽や欲望を軸として、社会的に編成された一群の観念や行動様式」に準じています。
- 4) 実際には初めから3種類の性シナリオの存在を仮定していたわけではなく、当初はエロス情報とリプロ情報の2種類のみを想定してインタビューガイドも作っていました。しかしインタビュー調査を開始して、4～5人の方にお話を聞いた段階で「性シナリオ」について、なるべく具体的に話を聞き出す必要性を感じ、質問の項目を増やすなどしました。
- 5) 「ロジスティクス」とはもともとは「兵站」を意味する軍事用語で、Council of Logistics Managementの定義によれば、「顧客の要求に応えるために、出発地点から消費地点までの、モノ、サービス、および関連する情報の効率的・効果的な運搬と保管を、計画・実施・コントロールするプロセス」をさす (<http://www.cscmp.org/Downloads/Resources/glossary03.pdf>)。ここでは、「自分の性的欲求を満たすために、必要な人やモノ、サービス、情報の流れをコントロールする手段」という意味合いで使っている。
- 6) 特に女性の場合は「性交の結果」が直接的に自分の身体に影響する可能性が高いので、リプロ情報は性的な実践において重要な要素となります。この部分でジェンダーによる差が大きく出ると思います。
- 7) たとえば「あん摩マッサージ指圧師試験」には医療概論、衛生学・公衆衛生学、解剖学、生理学、病理学概論といった科目があるので、理療科を出ている人は身体に関連する知識が一般の人よりはあると考えられます。

【参考文献】

- Butler, Judith. 1997, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*. London : Routledge = 2004 竹村和子訳『触発する言葉 — 言語・権力・行為体 —』岩波書店。
- 平山尚 1985『障害者の性と結婚』ミネルヴァ書房。
- 入谷仁士・木村龍雄 1999「障害児学校における性教育の必要性について ～養護・聾・盲学校における教師および養護教諭を対象とした全国調査より」『思春期学』Vol.17, No.3。
- 加藤秀一 1998『性現象論 — 差異とセクシュアリティの社会学』勁草書房。
- 木村龍雄・尾原喜美子 1997「障害児学校の性教育に対する教師の意識 ～養護・聾・盲学校の全国調査」『高知大学教育学部研究報告第1部』第55号。
- 岸田秀 1992「男と女のポルノグラフィー 唯幻論からのアプローチ」『ニュー

ー・フェミニズム・レビュー』3号。

NHK「日本人の性」プロジェクト 2002『データブックNHK日本人の性行動・性意識』NHK出版。

日本性教育協会編 2001『「若者の性」白書 ～第5回青少年の性行動全国調査報告』東京／小学館。

野原ひでの・下西さや子・浅野千恵 2004「視覚しょうがい児を対象にした性被害予防教育に関する一考察 ～アンケート調査による全国盲学校における性教育・性被害予防教育の現状」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』第9号。

尾原喜美子・木村龍雄 1997「障害児学校における性教育の現状と課題 ～養護教諭を対象とした養護・聾・盲学校の全国調査」『高知大学教育学部研究報告第1部』第55号。

佐藤（佐久間）りか 2005「視覚情報とセクシュアリティ — 盲学校の性教育が語るもの —」『F-GENSジャーナル』第4号。

全国高等学校PTA連合会 2004「高校生の心身の健康を育む家庭教育の充実」事業報告書。